「コミュニケーション重視の授業計画と人材育成 」

鳥取県国際交流財団 井岸 昌世

鳥取県国際交流財団西部日本語クラスの概要

鳥取県国際交流財団（西部）の日本語クラスは毎週日曜日に行っている。1回90分の授業で、前期12～15回、後期12回～15回の開催である。基礎クラスと初級クラスがあり、以前は両クラスとも日本語講師が担当していたが、講師不足で、現在は基礎クラスのみ日本語講師が担当し、初級クラスはボランティアとの会話練習である。主に日本人の配偶者、技能実習生、その他の就労者が参加している。国別にみると、ベトナム人が多いが、突出しているわけではなく、国籍は多岐にわたる。

課題設定の背景

日本語基礎クラスの参加者が数年前から 20 数名になり、途中参加者を含むと 30 名近くになる。それを講師二人で担当している。何とか分担しているが、負担が増えてきた。会話ボランティアに声をかけたところ、日本語教育の知識がないので講師は難しいとの返事が返ってきた。また学習者の背景や目的、レベルも一様でなく、従来の文法重視の教材では効果が上がらないのではないかと考え始めた。

課題への対策① 「いろどり」を教材とする。（8 月）

・各国語版があり、事前学習や自主学習がしやすい。
・目標が明確で達成感が得やすい。
・生活場面が豊富にあり、学習者が教室外で聞く日本語が多く盛り込んである。
・経験の浅い講師も進めやすい。
・著作権フリーである。

以上の理由から「いろどり」を使用することに決定。

対策② 人材を育成する前に講師二人が「いろどり」に慣れる

・講師二人とも「いろどり」を使用したことがない。その状態で新たな講師候補に声をかけるのには不安がある。
・できるだけお互いのクラスを講師が見学し合い、気づいたことを話し合った。（財団職員も見学）

＊クラスを終えて

・学習者がほとんど減ることなく最後まで参加した。
・学習者が遭遇しそうな場面が多くあり、そういうときは学習者の真剣みが増す。
・アウトプットが増えた。基礎レベルではないが、ボランティアとの会話は難しい学習

者が特に話そうとしていた。
・講師は準備の負担が減った。

＊反省点

・途中参加の学習者への自主学習の案内が不十分だった。
・少々詰め込みすぎた。学習者のニーズに合わせ、扱う場面をもう少し選択すべきだった。
・文法にこだわる学習者への対応は十分だったか。
・文字学習をどうするか。

対策③　　オンライン日本語教育人材研修（全県合同）

期間：1月13日～2月17日（90分×12回）
参加予定人数：37 名（西部地区8名）
研修内容 ： 県内の在住外国人及び地域日本語教育の現状
生活者としての外国人に対する日本語教育の目的
やさしい日本語の普及と活用、発話調整
「いろどり」を活用した授業について

＊ 1 月13日 第1回・第2回実施

今後の計画

夏ごろに実践を増やした研修を計画中である。今回の研修の参加者にクラス講師に興味をもってもらえるよう、授業見学や TT として授業に入ってもらうことも検討している。
また、まだ私個人の計画だが、冬季のクラス開催が難しい当地域で、オンラインクラスが開催できたら、交通手段のない学習希望者が参加できるのではないかと考えている。

地域日本語コーディネーターとして

鳥取県で暮らす外国人が少しでも住みやすいようにとの思いで始めた地域日本語コーディネーター研修だった。初めは自分の立場でどこまで踏み込んでいいのかとまどった。また平日は日本語教師としての仕事があり、時間も限られており、どこから始めるか全くわからない状態だった。結局一番身近な日本語クラスから始めた。研修報告として上記に挙げたことのほかに、人材研修や大阪での秋季研修を通じて、今まで関わりのなかった中部のコーディネーターとつながりを持てたこと、東部・中部の現状を知ったことで、今後の活動が取り組みやすくなった。